

日本遺産  
荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間  
～北前船寄港地・船主集落～  
多度津町



第4版

多度津町教育委員会

## 目次

はじめに	1
①交易と信仰の玄関口「多度津」	1
②日本遺産になった多度津町内の文化財	4
③北前船について	11
トピックス1 多度津七福神	13
トピックス2 多度津金毘羅街道	16
おわりに	17
サイトのリンク	18

表紙写真:多度津町立資料館所蔵「引札:てつや」

裏表紙写真:多度津町立資料館所蔵「引札:高見屋旅館」

## はじめに

多度津町は令和元年に、日本遺産『荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ～北前船寄港地・船主集落～』に追加認定されました。令和6年4月段階では全国16都道府県52市町（北海道石狩市・小樽市・函館市・松前町・青森県野辺地町・鱒ヶ沢町・深浦町・秋田県能代市・男鹿市・秋田市・由利本荘市・にかほ市・山形県酒田市・鶴岡市・新潟県新潟市・長岡市・出雲崎町・上越市・佐渡市・村上市・富山県富山市・高岡市・石川県輪島市・志賀町・金沢市・白山市・小松市・加賀市・福井県坂井市・南越前町・敦賀市・小浜市・美浜町・京都府宮津市・兵庫県新温泉町・神戸市・高砂市・姫路市・たつの市・赤穂市・洲本市・鳥取県鳥取市・島根県浜田市・広島県呉市・竹原市・尾道市・岡山県岡山市・倉敷市・備前市・大阪府大阪市・泉佐野市・香川県多度津町）になっています。江戸時代、北海道・東北・北陸と西日本を結んだ西廻り航路は経済の大動脈で、この航路を利用した商船は北前船と呼ばれました。北前船は、寄港地で仕入れた多種多様な商品を、別の寄港地で販売する「買い積み方式」により利益をあげたことから「動く総合商社」とよばれ、本海や瀬戸内海岸に残る数多くの寄港地・船主集落は、北前船の世界を今に伝えています。

### ①交易と信仰の玄関口「多度津」

多度津は古代の多度郡の港（賀富羅津）、さらに室町時代細川家家臣香川氏の拠点港（堀江津）として古くからの港町です。江戸時代、元禄7年に多度津京極藩となり、その管理のもと、四国の玄関口としてさらに栄え始めます。特に江戸時代後期、天保9年に整備された多度津湊甫によって港として更なる発展をします。

弘化4年（1847）に発行された金毘羅参詣名所図会には多度津のことを以下のように記しており、同じ讃岐国のなかでも高松藩の高松港・丸亀藩の丸亀港に並ぶほどの港として栄えました。特に西廻航路の寄港地として、廻船業に従事した商人たちが台頭し、港に接続する桜川の河口には交易品を納める海鼠堀<sup>なまこべい</sup>の蔵が、本通の町並みには町屋形式の住宅が建ち並んでいました。これらの蔵や建物のいくつかは現存しており、古い町並みを現在においても見ることが



このつ まるがめにつづ はんじよう  
 此津八圓亀尔續きて繁昌の地  
 なり原來波塘の構よく入船  
 もとよりはどう かまえ にゆうせん  
 の便利よきが故に湊に泊る  
 ふねおびただ はまべに ふなやど  
 船夥しく濱辺尔ハ船宿  
 はたごや あるい に  
 旅籠屋建てつづき 或ハ岸尔  
 じようさけにうり うどんそば  
 上酒煮賣の出店 温飽蕎麦の  
 ないうり  
 擔賣 甘酒餅菓子など商ふ  
 あきな  
 者往來たゆる更なく 其余  
 ゆきき そのほか  
 諸商人舟大工等ありて平常  
 ししょうにんふねだいくら つね  
 賑わし 且又西國筋往返の  
 にかつ さいごくすじおうへん  
 諸船の内金毘羅参詣なさんと  
 しよせん  
 す 後ハ此に着船して善通寺  
 ともがら ここ  
 を拝し象頭山尔登る 其都合  
 ぞうずざんに そのついで  
 よきを以て此尔船を待せ参詣  
 ここにふね  
 するもの多し  
 (金毘羅参詣名所図会元文)

(訳)  
 『この港は丸亀港に続いて繁盛した  
 場所です。堤の構え方がもとからよい  
 ため、入港しやすく、港の中にはたく  
 さんの船が停泊しています。浜辺には  
 船宿や旅籠が建ち並んでそのため丸亀  
 に並んで繁盛しています。岸边には酒  
 や煮売、うどんや蕎麦を担売り(棒で  
 担いで売り歩く)、甘酒や餅菓子の販  
 売などが絶える事がありません。その  
 ほかの商人や船大工などで常に賑わっ  
 ています。また西廻り航路を行き来す  
 る船のなかで金毘羅参りをする人たち  
 は、ここに着船して、善通寺を拝みな  
 がら象頭山を上っていくのに都合のよ  
 い多度津港に船を待たせて参詣する人  
 が多くいます。』

できます。廻船業に従事した商人の中で特に大成した7家(武田家3家、塩田家2家、合田  
 家、景山家)は多度津七福神<sup>た どつしちふくじん</sup>と呼ばれるようになります。彼らの資金によって明治維新以降の  
 近代化も四国内では先行して行われるようになります。また人名<sup>にんみょう</sup>(江戸幕府から自治権を認め  
 られる地位)を与えられた多度津町の高見島(たかみじま)や佐柳島(さなぎじま)では操船技  
 術に特化した集団が現れ、多くの水主(かこ)(船乗り)を輩出します。この集団は周辺の塩飽  
 諸島もあわせて「塩飽大工」と呼ばれ、北前船の発展に寄与することになります。

そして北前船の寄港地である事、さらに琴平との接続の利便性から、文化文政期(1804～  
 1829年)や天保期(1830～1844年)などの江戸時代後期(18世紀後半～)に多度津を起点と  
 した金毘羅参りが盛んになります。金毘羅参りのための街道も廻船業で財を成した商人たちに



## ②日本遺産になった多度津町内の文化財

### 金刀比羅神社（須賀の金毘羅さん）

北前船航路を利用した金毘羅参詣の起点となった神社の一つで金毘羅大権現上陸の地とされています。

祭神は大国主命、通称「須賀の金毘羅さん」と呼ばれています。創建時は不明ですが、少なくとも多度津藩陣屋がつくられる天保期以前から多度津町大通り付近にあり、現在の位置には陣屋が造られたときに移設されました。琴平町の本宮との直接的なつながりも強く、本宮例大祭に使用する塩水と海藻を採取する「汐汲藻刈神事」<sup>しおくもがりしんじ</sup>を行う場所でもあります。

現在は町内に点在していた10基の金毘羅燈籠が道路の拡幅などに際して境内に移設されています。さらに鳥居は天保11年に造られ、多度津藩陣屋が構築された時期と重なる直接的な遺構だといえます。



昭和初期の社殿周辺



天保11年の鳥居



金毘羅大権現御上陸の地碑



## こんぴらどうろうぐん 金毘羅燈籠群

北前船航路によって栄えた多度津金毘羅街道周辺に設置された常夜燈（22基）。金毘羅街道周辺に設置され、道標兼街灯の役割を果たしました。雲州（島根県）や防州（山口県）、芸州（広島県）や予州（愛媛県）、遠くは尾州（愛知県）など多くの町外の人々が出資者となっていることから、金毘羅参りで多度津港を利用した人間が全国各地に広がり、町並みを作り上げてきたことがわかる重要な建造物群であるといえます。位置図上と写真に◎がついているものは町指定文化財になっています。



須賀の金毘羅さんの金毘羅燈籠



鶴橋の金毘羅燈籠 ◎

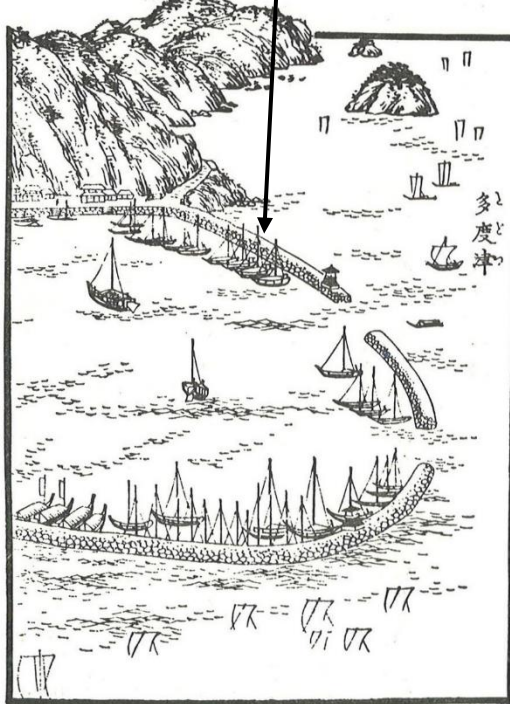
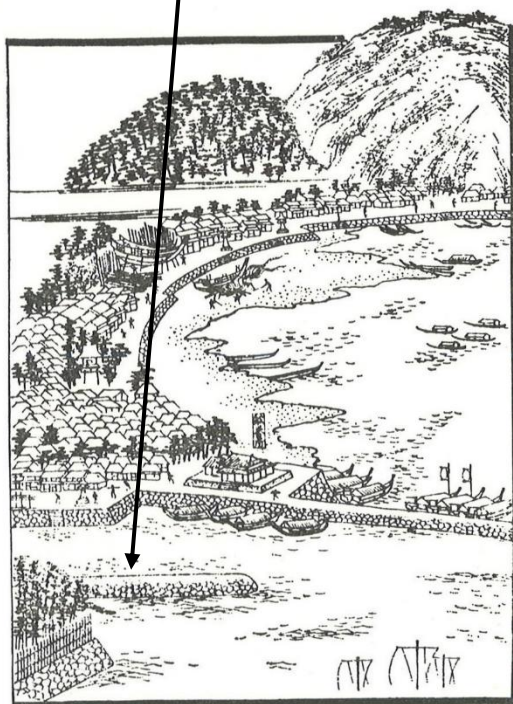


桃陵公園内の金毘羅燈籠

北前船を停泊させるために整備された港湾施設。天保9年時（1838年）に河口部を利用して古港を改修した際に造られたもので、手狭になった港の整備と河川及び潮流による砂洲上に構築され、町域に氾濫、さらに港湾地区が・潮流や波浪等によってなどで浸食される事を防ぐために造られたものだと考えられます。この際に水深も深くとられ、大型の弁才船（千石船）が入港できるようになったことから、多くの北前船やその他廻船が往来するようになりました。江戸時代幕末期（慶應期）に造られた護岸が最近まで確認できていましたが、近年の護岸工事によって見えなくなっています。現在は明治時代末以降（1912～）に改修されたもの一部見ることができます。護岸には当時のもやい石も残っています。



多度津湛甫に関する石積



多度津

当時の多度津湛甫（日本名所風俗図会 多度津港）



えびすじんじゃ  
恵比須神社

創建時はよくわかっていませんが、おそらく江戸時代中期以降。周辺には多度津藩の魚役所や魚市場があり、港の玄関口に接する一番海に近い場所にあった神社です。そのため後に港近くにあった金毘羅燈籠が2基移設されています。その一つには「渡海安全」と刻まれていることから、北前船に関わる人たちが航海の安全を祈願して建立した神社であると考えられます。



恵比須神社

いつくしまじんじゃ  
巖島神社

「弁天さん」とも呼ばれています。多度津山桃陵公園の東入口の斜面にあり、北前船の航海安全を祈願するために設置されました。海運・商業の神様として江戸時代後期頃に整備されたと考えられます。



巖島神社

しらひげじんじゃ  
白鬚神社

祭神は猿田彦命。<sup>さるたひこのかみ</sup>創建時は不明。安永7年（1778年）に製作され町内では最古級の燈籠があります。猿田彦が導きの神であるため、元々は金毘羅街道が本町筋に移る前の旧金毘羅街道で<sup>ほんまちすじ</sup>あった<sup>たちまちすじ</sup>田町筋の起点に位置する神社です。そのため北前船航路を利用した金毘羅参詣の要所の一つといえます。毎年11月に開催される例祭では獅子舞が参道の階段を駆け上がる獅子の宮入が行われます。



白鬚神社鳥居



白鬚神社南側の田町筋  
（旧金毘羅街道）



安永7年の燈籠

## こんびらとりい たどつとりい 金毘羅鳥居（多度津鳥居）

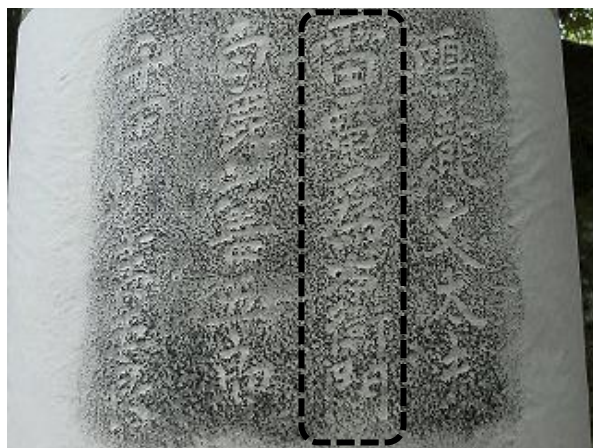
町指定有形（建造物）。寛政6（1794）年創建の金毘羅街道「一の鳥居」。寄進者は、  
うんしゅうまつえ こんびらこうちゅう  
雲州松江の金毘羅講中（金毘羅詣りをする信仰者の集まり）の人たちです。その中には雲州松江藩松平公のお抱え力士、大関「らいでんためえもん 雷電為右衛門」の名も刻まれています。元々は町内の鶴橋南側に設置されていましたが、道路の拡幅等で現在は桃陵公園内に移設されています。北前船やその他廻船などを利用して降り立った参詣者たちが、街並みを抜けて本格的に金毘羅街道に入っていく場所であると言えます。

金毘羅さんまでにはこの一の鳥居のほか善通寺市永井に「二の鳥居」、琴平町の<sup>たかどうろう</sup>高燈籠近くに「<sup>さん</sup>三の鳥居」がありますが、二の鳥居は江戸時代の地震で倒壊したため、現在は基礎と柱の一部が残り、三の鳥居は一の鳥居同様に本来の場所から移設されて現在の位置にあります。

このように街道が整備されていくことで、さらに北前船の入出港が増えていき、多度津港がより受け入れをしやすくする為に、多度津湛甫が整備されていくことにもつながっています。



現在の金毘羅鳥居（多度津鳥居）



鳥居の柱に刻まれた文字の拓本



移設される前の鳥居（昭和10年頃）



ひがしはま にしはま ほんどおり まちな  
東浜・西浜・本通の町並み

北前船によって繁栄した金毘羅街道沿いの町並み。東浜・西浜には旅館などが立ち並び繁華街が造られ、本通には北前船船主、廻船問屋の町屋群とそれに関連する諸施設およびそれらを内包する近世及び近代の伝統的建造物群を見ることができます。



きゅうしおたけどそう  
・旧塩田家土蔵

北前船で財を成した廻船問屋・多度津七福神「塩田家（煙草屋）」が北前船の積み荷を集積するために使用した土蔵です。建造当時の大振りの桁梁がそのまま残っています。



旧塩田家土蔵

きゅうあさひやりよかん たけだ けじゅうたく  
・旧朝日屋旅館（竹田家住宅）

金毘羅参詣で多度津港に立ち寄った参詣者の泊った旧旅館。現在も築造当初の間取り、表構えが残っています。



旧朝日屋旅館（竹田家住宅）

きゅうこうだけじゅうたく こうだてい  
・旧合田家住宅（合田邸）

町指定有形文化財（建造物）。北前船で財を成した廻船問屋・多度津七福神「合田家（島屋）」の住宅。

主屋は明治時代に建てられたものが現在も残っています。当時のトレンド（レンガ式の倉庫やステンドグラス）を次々と住宅の増築時に取り込んでいくため、

和洋折衷の複雑な建築様式となっています。



合田家住宅（合田邸）

た ど つ ち ょ う り つ し り ょ う か ん き た ま え ぶ ね か ん れ ん し り ょ う ぐ ん  
**多度津町立資料館北前船関連資料群**

県指定の北前船模型の他、関連文書や往時の多度津の図絵など北前船関連資料など資料館所蔵の資料群です。多度津町立資料館で収蔵されています。

た か み は ち ま ん ぐ う ほう の う も け い わ せ ん  
**・高見八幡宮奉納模型和船**

県指定有形民俗文化財。江戸時代に高見島にいた船主が、航海の安全を祈願して奉納したものです。作者はおそらく高見島在住の船大工（塩飽大工）と思われ、船底に宝暦5（1755）年、大倉好右衛門と中野八左衛門という墨書きされています。



高見八幡宮奉納模型和船

き た ま え ぶ ね か ん け い こ も ん じ ょ  
**・北前船関係古文書**

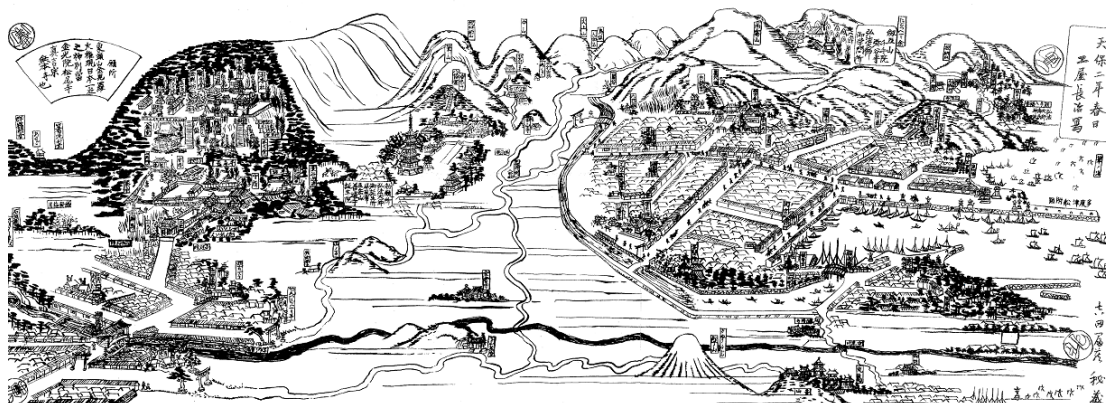
町指定の歴史資料です。北前船寄港地である多度津港及び高見島の船主に関係する江戸時代後期から明治時代にかけての往来手形や絵図、日誌、買目録や覚書類などがあります。これによって多度津船籍の北前船が北海道や日本海側に広く、商売を行っていたことを見ることができる資料です。



北前船関係古文書

こ ん び ら さ ん け い す え  
**・金毘羅参詣図絵**

天保二年に工屋長治によって写された、多度津から金毘羅までの道筋の概略を示した絵図です。特に江戸時代後期の多度津の様子がフォーカスされているため、その当時の町並みや多くの船が入りしていた港の様子を見ることができる資料になります。



金毘羅参詣図絵

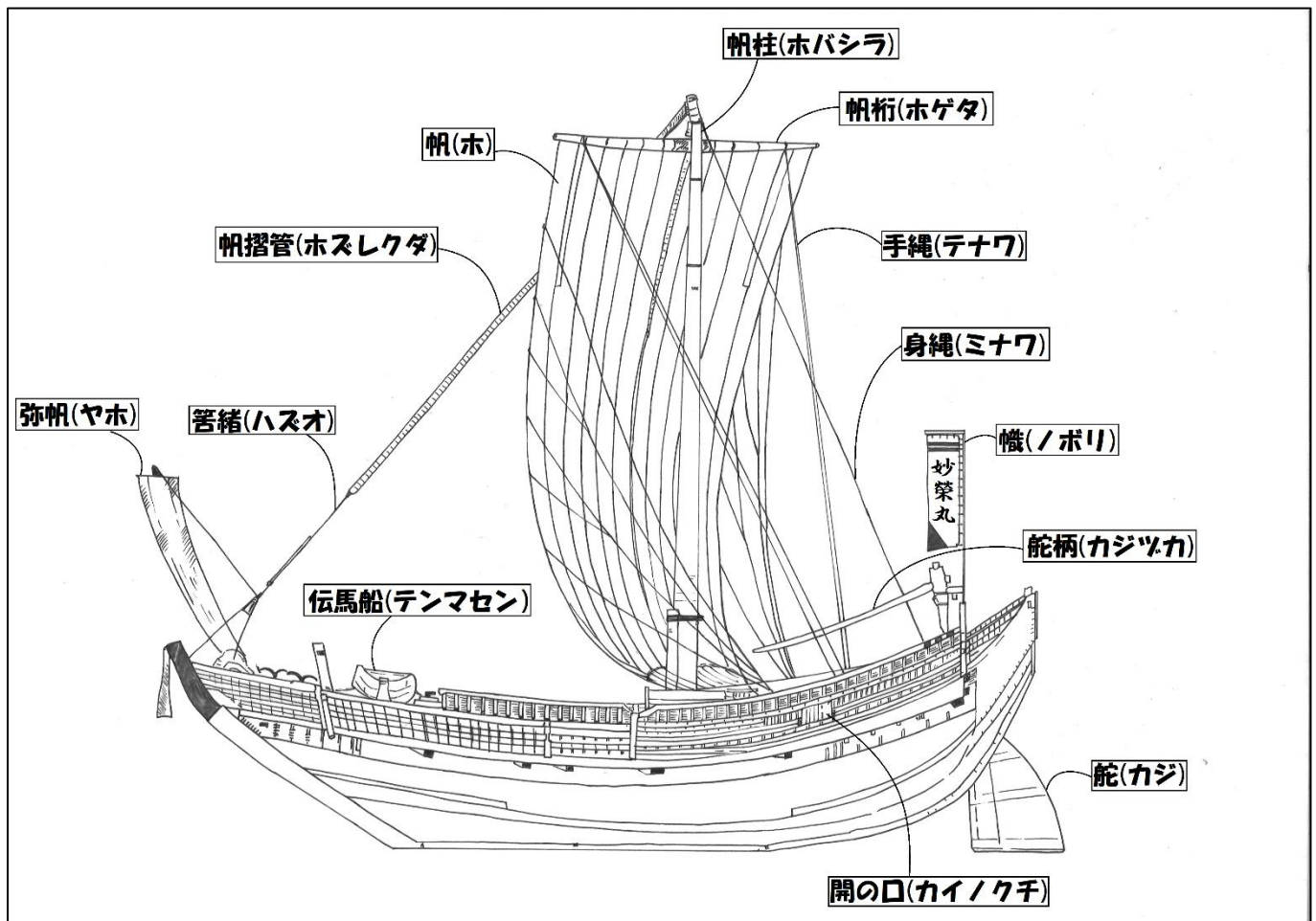


### ③ 北前船について

北前船とは何でしょう？ 実は船そのものの種類ではありません。商業の買積方式（廻船に商品を積み込み、それらを各港の廻船問屋に売り、さらにそこで買い入れた商品を他の港で売って利益を上げていく商売）で商売をするスタイルを表したものです。そのため正式な船の名称は弁才船となります。ちなみにこの当時菱垣廻船や樽廻船と呼ばれるものもあり、これは上方（大阪）から江戸に向けた商業用船舶のことを指しますが、ここで使われている船の種類も基本的には弁才船です。

弁才船のサイズ（千石船）は全長約30m、巾は約8m、帆柱の高さ27mになります。15人乗りで、重量は150トン程度になります。

次に弁才船はどれくらいのスピードで航行していたのか？ 弁才船は江戸—大阪間を6～12日で行き来し、大阪—北海道間約2カ月で行き来していたとされています。そのため平均速度は潮流と風を利用して6ノット（時速11kmくらい）程度だったと考えられます。



また、弁才船の値段は一石＝一両換算として、１０００石船は１０００両。当時の一両は１３万円くらいなので１０００石船一隻は１億３０００万円となります。現在の復元船の製作費は青森県の<sup>のへじ</sup>野辺地町にある「みちのく丸」で２億円。かなりの高額ではありますが、当時１回の北前船が稼いでいた金額は１０００両以上と言われており、一度の航海で建造費用分は稼げていたことになります。

### （用語説明）

<sup>ほばしら</sup>帆柱…メインマスト（帆：本帆）を張るための帆桁を下げするための柱

<sup>やほ</sup>弥帆…船の舳先に張る補助帆

<sup>てなわ</sup>手縄…帆を張るための縄。帆の向きなどを調整するためにも使われる。

<sup>みなわ</sup>身縄…帆桁に結び付け、滑車などで帆を上下させるときに使う縄

<sup>かじ</sup>舵…船の進行方向を変えるために使われる。船乗りは舵からつながった舵柄をもって、舵の方向を転換する。

<sup>はすお</sup>箒緒…帆柱の先端から船主に掛けて張る綱。帆柱を支える。

<sup>ほすれくだ</sup>帆摺管…帆柱を前から支える綱に取り付けられた管状の船具、これを使うことによって綱と帆が擦れて痛まないようにしています。

<sup>てんません</sup>伝馬船…北前船（弁才船）などの母船から荷物を降ろすために使われた<sup>はしけぶね</sup>舢舨船の一種。

<sup>かい</sup><sup>くち</sup>開の口…船の出入り口



## トピックス1（多度津七福神）

北前船の寄港地として、船主と、北前船を利用して各地の物産を売り買いする商人が現れます。それらの商人を廻船問屋といい、多度津でとくに有名な廻船問屋で財を成した商人を「多度津七福神（武田3・塩田2・合田・景山）」と呼ばれていました。彼らは明治時代になると、近代化のために多くの資金を出資することになります。

多度津から各地へ輸出したのが讃岐三白と呼ばれる砂糖・綿・塩です。あとさぬきの名産だけではなく、四国山地を越えた高知の商品を取り寄せて多度津から輸出しているものもありました（例：和紙）。また 輸入していたものは米や北海道産の昆布、サンマ、味噌醤油、干鰯（肥料）などがあります。



塩（鹽）田岩五郎  
煙草屋（東）



塩（鹽）田角治  
煙草屋（西）



合田房太郎  
島屋



景山甚右衛門  
大隅屋



武田定治郎  
尾道屋



武田謙



武田熊造  
尾道屋



武田茂祐  
尾道屋

屋号・氏名	業 績
<p>おおすみや かげやま じんえもん 大隅屋 景山 甚右衛門</p>	<p>安政 2 年（1855）4 月 15 日 生 ～ 昭和 12 年（1937）10 月 19 日 没 83 歳 墓所：摩尼院（仲ノ町）</p> <p>明治 6 年（1873）、父の死により 19 歳で家業を継ぎ、北前船による廻船問屋・米問屋・干鰯・砂糖等の交易に従事した。明治 20 年（1887）大久保謙之丞らとともに「私設鉄道願」を提出し、明治 23 年（1890）の讃岐鉄道開通に貢献した。また、明治 24 年（1891）には県下最初の私立銀行である㈱多度津銀行を設立した。さらに、明治 40 年（1907）からは、経営不振に陥っていた讃岐電気㈱の社長となって再建に努め、社名を四国水力電気㈱に改め、経営の安定化を果たした。政治家としては、多度津町会議員や衆議院議員を数期にわたって務めるなどして活躍した。</p>
<p>たばこや しおた かくじ 煙草屋 塩田 角治</p>	<p>慶應 3 年 2 月 20 日生～昭和 20 年 12 月 6 日 没 78 歳 菩提寺：多聞院（仲ノ町）</p> <p>西の煙草屋。萬問屋であり廻船問屋・萬問屋・石炭等の交易に従事した。江戸時代には松尾寺金光院金堂（現 国指定重要文化財「金刀比羅宮旭社」）の建立に際して寄進をした。また、香川県下の資産家を相撲の番付で表した『香川県讃岐国繁栄名拳鏡』（明治 25 年&lt;1892&gt;）では、角治の父親である「塩田与七」が西前頭筆頭に名を残しており、多度津町では随一、県内でも有数の資産家であったことが分かる。政治家としては、多度津町議会議員を勤め、町政に貢献した。</p>
<p>たばこや しおた いわごろう 煙草屋 塩田 岩五郎</p>	<p>生没年不明 菩提寺：多聞院（仲ノ町）か</p> <p>東の煙草屋。廻船問屋であるが詳細は不明。『香川県讃岐国繁栄名拳鏡』（明治 25 年&lt;1892&gt;）に名前が載っている。多度津町会議員を数期にわたって務めるなどして活躍した。</p>
<p>しまや ごうだ ふうさたろう 島 屋 合田 房太郎</p>	<p>文久元年（1861）3 月 29 日 生 ～ 昭和 12 年（1937）1 月 24 日 没 77 歳</p> <p>父の家業を継ぎ、廻船問屋、米穀肥料商を営んだ。『香川県讃岐国繁栄名拳鏡』（明治 25 年&lt;1892&gt;）に名前が載っている。㈱多度津銀行取締役や四国水力電気㈱取締役社長などを歴任し、その経営力を発揮した。また、政治家としても多度津町議会議員を数期にわたって務めるなどして活躍した。 なお、房太郎の子（次男）である合田健吉（1897～1975）は、四国水力電気㈱等の取締役、貴族院議員、第 13 代町長などを歴任した人物である。</p>

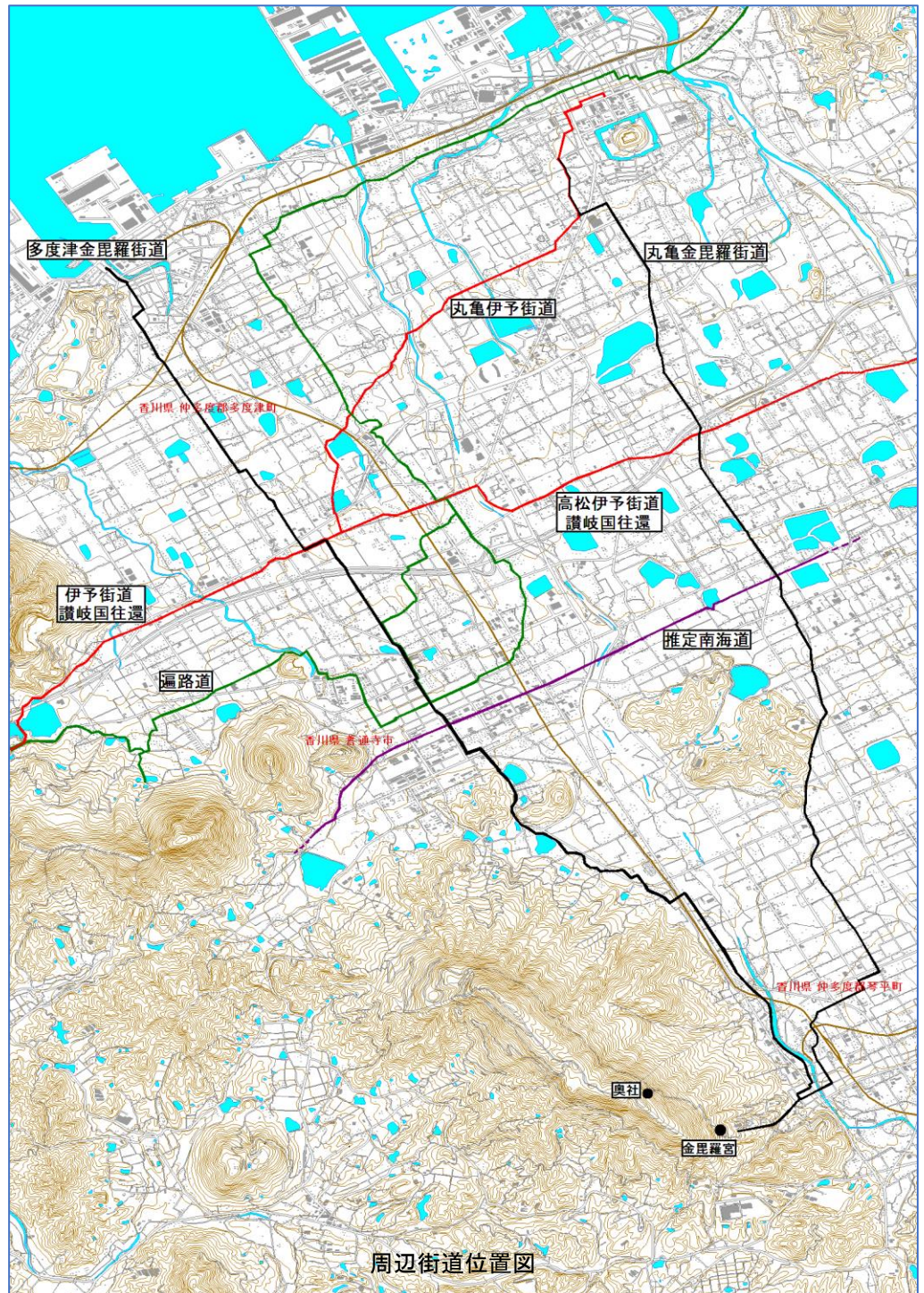
屋号・氏名	業 績
<p>おのみちや 尾道屋</p> <p>たけだ <b>武田</b></p> <p>ゆする <b>譲</b></p>	<p>明治 22 年（1889）或 23 年（1890） 生 ～ 昭和 42 年（1967） 1 月 10 日 没 77 歳 菩提寺：宝性寺（本通一丁目） 武田家南町本家</p> <p>廻船問屋・材木商などを営む。武田家の総本家。『香川県讃岐国繁栄名拳鏡』（明治 25 年〈1892〉）に父親である「武田定治郎」の名前が載っている。多度津町会議員を務めた。父親とともに町内の寺社仏閣への寄進を多く行い、金毘羅街道の整備も多くおこなったようである。そのためか町内の金毘羅街道沿いの土地の多くは武田家の所有が多く、武田家は金毘羅宮まで自分の土地を通っていけるといわれたほどである。</p>
<p>おのみちや 尾道屋</p> <p>たけだ <b>武田</b></p> <p>もすけ <b>茂祐</b></p>	<p>明治 12 年（1879） 生 ～ 昭和 30 年（1955） 没 菩提寺：宝性寺（本通一丁目）</p> <p>廻船問屋を営む。武田家浜本家（東浜）。初代 武田茂祐（総本家 武田豊蔵の弟）の孫にあたる 2 代目 武田茂祐である。多度津町会議員を数期にわたって務め、荒れ地の開墾を精力的に行っていた。</p>
<p>おのみちや 尾道屋</p> <p>たけだ <b>武田</b></p> <p>くまぞう <b>熊造</b></p>	<p>安政元年（1854）9 月 23 日 生 ～ 大正 11 年（1922）3 月 28 日 没 69 歳 菩提寺：宝性寺（本通一丁目）</p> <p>廻船問屋・米穀肥料を営む。武田家浜新屋（東浜）。初代 武田茂祐の次男に生まれ、分家して米穀肥料商を営んだ。㈱多度津銀行の創立に携わり、讃岐電気㈱・四国水力電気㈱では取締役として、景山甚右衛門とともに事業の再建と安定化に尽力した。また、多度津商工会議所の前身団体や教育団体「明德会」の設立に携わったほか、県立多度津中学校の設立に際して寄付を行ったり、私財を投じて公会堂「楽水館」を建てたりするなど、教育・産業発展のための活動にも熱心であった。政治家としては、多度津町会議員を数期にわたって務めるなどして活躍した。妹は景山甚右衛門の妻エイ。また、第 14 代町長で民俗学者でもある武田 明（1913～1992）、版画家の武田 三郎（1915～1981）は熊造の孫である。</p>



## トピックス2（多度津金毘羅街道）

多度津周辺には伊予街道や遍路道など様々な旧街道が通っていますが、その中に江戸時代中期頃から盛んになる金毘羅詣りに使われた道「金毘羅街道」も通っています。金毘羅街道は大きくは高松金毘羅街道・丸亀金毘羅街道・多度津金毘羅街道があります。多度津金毘羅街道は現在の多度津商工会議所あたりから南下し、一の鳥居をくぐり、善通寺市中村町永井の二の鳥居を中継し、最終的に琴平の三の鳥居までのルートになります。参詣者の多くは多度津以西及び日本海側から利用することが多く、山口県・広島

県・島根県などから訪れていたことが確認されています。さらに北前船の寄港地と相まって、街道沿いは宿場が立ち並んでいました。また北前船の寄港に伴い、参詣ができない人の代わりに代参が行われており、奉納する樽などを運ぶルートでもありました。元々は町内の白鬚神社から南下する田町筋に通っていたと考えられますが、江戸時代中期以降に整備され、現在の場所に移ってきたと考えられます。



## おわりに

これまでの内容で、多度津町に北前船に関わる痕跡が様々な場所に残っていることが分かっていただけたと思います。これらの痕跡は北前船が訪れることによって多度津が商業を中心に栄えてきたこと、合わせて信仰といった点からの他地域との交流を連綿と続けているのだということも示しています。

今回紹介した様々な北前船に関わる痕跡、次は実際に目の当たりにしていただいて、往時の北前船寄港地・船主集落、多度津を肌で感じていただければと思います。

＊他の地域の寄港地については以下のサイトでご確認ください。

北前船 KITAMAE 公式サイト

<https://www.kitamae-bune.com>



北前船データベース

<https://www.kitamae-bune-db.com>



＊町内の日本遺産や文化財マップ、一部 VR については以下のサイトでご確認ください。

多度津町日本遺産マップ

多度津町文化財マップ

多度津町の輸送近代遺産（VR）





日本遺産

荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間

～北前船寄港地・船主集落～

多度津町

発行 第4版 2025（令和7）年12月16日発行

編者・発行所 多度津町教育委員会

〒764 - 8501

香川県仲多度郡多度津町栄町3丁目3番95号

電話 0877 - 33 - 0700

